

## 2. 技術研究「危急時と雪崩対策」について

# 危急時対策用装備

山本 一夫

危急時対策用装備は大別して、チーム用と個人用とに分かれ、山行形態によっては異なるが、いずれにしても必携装備であることを、改めて認識したい。一般的に登山者は、ルックザックの重さは、出来る限りの軽量を望むが、軽いということは肉体的に楽であっても、精神的には不安が残る。というのは装備、食糧を充分に持ち、さらに危急時対策用の装備を詰め込んだルックザックが、大変に重くなるのは当然で、肉体的には苦痛でも精神面では余裕が生まれ、危急時にも慌てることなく適確に対処ができるわけだから、ここで一つ言えることは、ルックザックの重さは、自分自身の「命」の重さにつながると言うことだ。

重荷に耐えられるように、日頃よりトレーニングすることが肝要であろう。

### チーム用装備

チーム用装備として、まず「ツェルト・ザック」がある。2人用で450gと軽量だが、役目は重く生地0.0数mmが生と死のボーダーラインとなる。

積雪期においては、特に非常食よりも優先させたいのが、「コッヘル」と「こんろ」に、「予備の燃料」である。人体に重要な水分の補給と暖がとれる。これらの装備は、セットにして2～3人のチームに1組の割合で携帯すべきである。又、雪洞掘りや雪崩対策用に「小型ショベル」は、外すことのできない装備となろう。「トランシーバー」も必携品ではあるが、その運用には十二分の注意と配慮を必要とする。

### 個人用装備

第一に「シュラフ・カバー」もしくは、「エマージェンシー・ブランケット」（アルミ繊維素材）であるが、これは日帰り山行であっても携帯すべきであろう。その他に「ナイフ（ハサミ付）」、「テーピングテープ」、「ホイッスル」、「防水マッチ又はライター」、「メタ」、「ローソク」、「針金」、「ロープ（6mm×10m）」等が上げられる。だが「備えあれば憂いなし」程度の心積もりでは、危急時に対応できない。

単独での山行は勿論、チームでの山行においても常に考えて行動してほしいことは、自分自身のことである。「自分の面倒が見られない者に、他人の面倒が見られる筈がない」危急時には特にこのことが言える。自分のことが100パーセント管理出来るということは、自ら余裕が生まれ、他人のこともやチームの世話も出来るようになる。これらのことから、個人装備を選ぶポイントとして、ピンチに際しても自分は絶対助かるのだという観点から、選択して行くべきである。

「危急時」とは、生か死かの瀬戸際に立った場合のことだが、突然にはやって来ない。その過程には

## 2. 技術研究「危急時と雪崩対策」について

幾つかの危急時へのシグナルが発信されている筈で、初期の段階でこれを察知し、素早く対処している能力を身に付けることだ。

自然界に関する知識と経験を養い、研ぎ澄まされた直観は、唯一の武器となろう。

(日本山岳会員)